

北 どころ

第102号 2024年9月1日（毎月1日発行）

郷土の本棚⑬（文責・赤川仁洋）

「庄原・原爆の記録第2集」

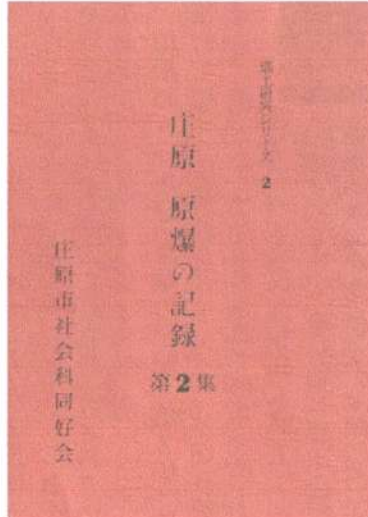
庄原市社会科同好会

先月号の第一集の紹介で、庄原日赤に最後まで残っていた被爆軍人患者の佐々木泉さんのことを書いた。その佐々木さんが第2集に「被爆手記」を寄せている。末尾に「(S47・5・15記)」とあるので、46歳のときの手記である。

佐々木さんは大正15（1926）年10月7日生まれ、被爆当時は19歳である。昭和20年1月に徴兵検査を第一乙種に合格、同年5月広島第一一四部隊（工兵隊）に入隊する。3カ月の基礎教育を終えて初めて歩哨に立ったのが8月6日の午前8時、原爆投下の直前である。体が吹き飛ばされ、失くした銃を必死に探し出して自分の体を見ると、軍服が燃えていたという。

嬉しくて家庭のことを話したが、だが、同情してくれた婦人会の人が代筆して、岡山の実家に手紙を出してくれた。両親が見舞いに来てくれたが、受付で「佐々木泉さんは、もう亡くなったでしょう」と言われたが、近くにいた婦人会の人が佐々木さんのいる部屋まで案内してくれただ。患者たちはみんな同じように黒い顔をしているので、自分の息子がわからない。「この人が佐々木さんですよ」と言われても半信半疑。「お母さん来てくれたんか」という声を聞いて、ようやく我が子だとわかったという。

「学校の窓から田んぼを見ると、稲穂が出そろって、まるで天と地が私を祝福しているように思いました。」退所時の佐々木さんの感慨である。「庄原は私の第二の故郷の気持で、一生忘れることのできないところですよ。」と書いていた。



どうにかして芸備線で庄原駅までたどり着いたのが9日の午後。婦人会の人が用意していた担架で、庄原日赤の隣の庄原国民学校まで運んでもらった。「軍隊に入隊してからその日までに、こんなに暖かいもてなしを、また言葉をかけてもらったことはありませんでした」と佐々木さん。

井伏鱒二の原爆小説「黒い雨」に、庄原日赤での闘病の手記が登場する。「広島被爆軍医予備員・岩竹博の手記」。広島第二陸軍病院教習所で被爆した岩竹は、戸板国民学校の仮収容所にいたが、患者の人数が多すぎるために庄原の陸軍病院分院（庄原日赤）に一部患者を移送するという発表があった。

「各自の体力において、庄原まで汽車に乗れる自信のある者は、手を挙げる。戸板から庄原まで、汽車で三時間だ」行きたいけど、病状がひどくて手を挙げられなかった者もある庄原でも地獄がまっているのだが、愛国婦人会の存在は救いであつたろう。岩竹は何度も死線をさまよい、退院後も原爆病を発症したが、どうにか恢復して社会復帰を果たしている。



発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10

誌面デザイン: ROUTE183
協賛：九日市愛好会